

## 10. 防災を身近に感じるからこそ最強の守り

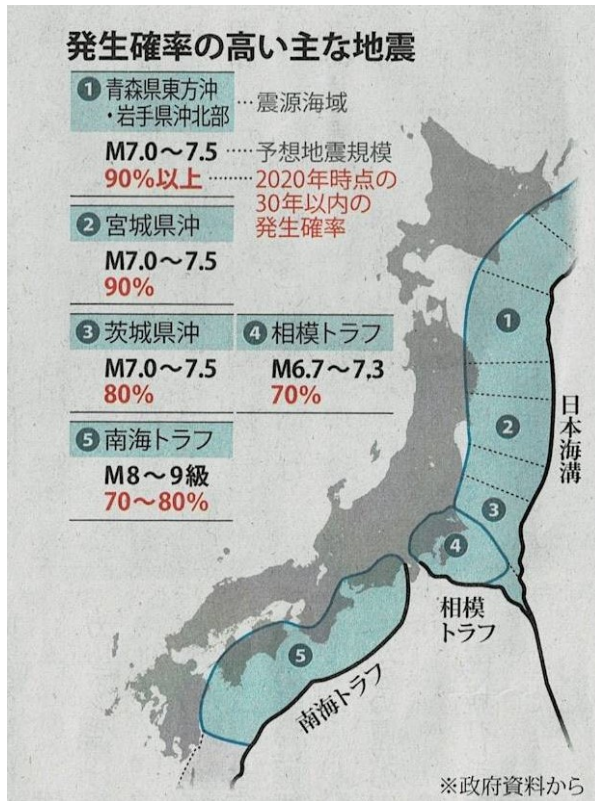
自然現象や自然災害を学ぶことは、さまざま領域に関係することから幅の広い視点から関心を持つことができます。防災というかしこまったものでなくても、生活をするための安全安心な環境を維持することは必要なことですが、あまり日常はその状況には縁がないと思われていて、自然災害にあつて、怖い目にあつたとか被害や犠牲ということに直面すると、自然災害の恐ろしさに驚きます。しかし、そうなっては遅いわけで、自然災害は必ず起きることを思うと、事前にできることがあれば備えや知っておくことが大切なこととなります。自然からの直接的な略奪を生活の主たる手段としていた時代は、ある程度地域の災害リスクを共有していたのですが、都市化が進むと、利便性が優先されて自然の振る舞いから縁遠くなっていったのではないのでしょうか。インフラが整備されると、それへの信頼が高まって、どんどん居住域も広がって行って、かつてどんな土地利用がなされ、どんな歴史があるのかには関心がなくなっていきます。そこに豪雨や地震といった外的な作用が加わると、潜在化していた災害リスクが顕在化するということになります。当然、居住している人は、そんなことは聞いていなかったとか経験したことがない、まさかこの地でということになりますし、避難するにしてもいつ、どこに、どうやってということでも混乱が起きます。と同時になんとなく自分は大丈夫と言う心理が働いて、不幸なことに巻き込まれることはいつの災害でも起きます。もちろん、災害への備えは、地域の特性で様々でしょうが大事なことは直観力が働いて先に何が起きるのかを見える人にならなければなりません。そのためには、少なくとも地域知に関心を持って、どのようなリスクがあるのか、万一のときにはどのような行動が基本形を知っていることで不適切な行動による被害は少なくなると思います。

防災を学ぶことは、改めてわれわれの生活の基盤である環境を通して、自然現象とわれわれの生活との関係を考えることであり、豊かで健全な環境づくりが自然現象を緩和することにもつながります。そして、あらゆる場面で、自然にいかされていること、自然現象の恵みを活用し、都合の悪い負荷をかわすという知恵は人間が代々つないで他財産であり災害文化の再興を意識すべきだと思います。

東日本大震災から10年が経過しました。その間も余震が続いていますし、2016年の熊本地震、2018年の北海道地震が発生し、2019年の台風19号での豪雨災害といわば想定を超える被害や犠牲を招きました。この10年を考えると、改めて災害列島に生活しているということを実感するとともに自然災害とどのようにつき合っていくべきなのかを考え続けた時間だった気もします。例えば、地震の発生確率の高い地震という資料を見ると、無いことを願うのではなく、どこでも必ず起きると考えてしまいます。

## 発生確率の高い主な地震

- |                     |                             |
|---------------------|-----------------------------|
| ① 青森県東方沖<br>・岩手県沖北部 | …震源海域                       |
| M7.0~7.5            | …予想地震規模                     |
| 90%以上               | …2020年時点の<br>30年以内の<br>発生確率 |
| ② 宮城県沖              |                             |
| M7.0~7.5            |                             |
| 90%                 |                             |
| ③ 茨城県沖              | ④ 相模トラフ                     |
| M7.0~7.5            | M6.7~7.3                    |
| 80%                 | 70%                         |
| ⑤ 南海トラフ             |                             |
| M8~9級               |                             |
| 70~80%              |                             |



また、この間には、ハザードマップが整備されて、大まかな危険な地域がわかるようになりました。また、情報の面でも、様々なツールが開発されて、安否確認や現場状況、気象の変化など多様なことが、有益な情報として処理されて、正確で的確な避難方法が伝わるような仕組みが進化しています。また、避難所についても、これまでの経験を参考に環境改善が進むと同時に、運営の仕方や役割なども明確になりつつあります。ただ、自然災害には想定がつきものですし、社会システムの変化もありますので、地域リーダーだけでなくフレキシブルな構想力が求められています。つまり、身近な防災という意識を持って、あらゆる機会に考えることは大事になると思います。